

現代の学生像・学生論



橋本 広信

群馬社会福祉大学・社会福祉学部

ヤジロベエ

(釣合人形)

「ぐらぐら」「ふらふら」…。

講義中に発した「現代に生きる大学生の特徴とは」と私の思いつきの問いに対し、ある学生は、彼らがイメージするかつての学生と自らの世代のイメージを比較しながら、「こんな言葉を口にしたら、明るく友達と笑いあいながら、何かはつきりと悪いこととかがあるとは感じないと言いながらも、自分たちのどうにもはつきりとしなないあいまいさを、彼らは口々に語ってくれた。

現在進行形で今を生きる彼らからすれば、かつての大学生は、今より楽だとは感じないものの、どこかしつかりと

した枠組みの中で生きており、生き方にもはつきりとした軸のようなものがあつたと感じているようであつた。自分たちはというと、大学には自分の意志で来たものの、いざ入学してみると確かにあつたはずの「やりたいこと」はあいまいになり、「何をやったらよいかわからない」という状態になつたという。

「資格」を取り、「よい就職」をするといふ具体的な目標は確かに現実のものとして身近にあるのだが、それが本当に大学に入った目的だったのか。自分で自分の思いに疑いをもち、それでも毎日をそれなりに楽しんでる。ただ、大学の先、つまり、社会というものへの重圧を常に背中に

感じ、毎日をごく不安と焦りの中で生きている…。

彼らの話を聞きながら、私の頭の中には、昔懐かしい玩



はしもと・ひろのぶ●一九七〇年、愛知県生まれ●主な著書・論文に共著『自分さがしの青年心理学』（西平直喜・吉川成司編著、北大路書房、二〇〇〇年。（共著）『大学生論』（溝上慎一編著、ナカニシヤ出版、二〇〇二年。（共著）『自己意識研究の現在』（梶田毅一編著）ナカニシヤ出版、二〇〇二年。『心をささえる生徒指導』（原田信之編著）、ミネルヴァ書房、二〇〇三年。（共著）『生きる力を育む生徒指導』（宮下一博・河野莊子編著）、北樹出版、二〇〇五年他●学生「ダメ論」というものはいつの世でも流行するものでしょう。学生達自身も、自分や仲間のことを「甘い」「ダメ」「努力していない」等々と語ります。しかし、いつの世も、私には学生達が輝いて見えます。よいとか悪いとか学力が高いとか低いとか、大切な議論かもしれませんが、大学と学生のもつ可能性には、いつもロマンを感じています。たぶん「大学」と「学生」が私は好きなのだと思いますが、可能性を打ち消すような議論に終始することより、教員も含め、大学と学生に関わる大人達がすべきこと、できることはもともとあるはずと感じ、それを探す毎日です。変化しながらも崩れない価値ある何かを社会と未来を担う若者に提供できるかどうか。これは大学が考えねばならない大きなテーマだと思います。

具、ヤジロベエ(釣合人形)のイメージが浮かんできた。よい就職をしたい、でも自信がない。やりたいことはある、でもそれが何かわからない。自由を楽しみたい、でも勉強しないといけない。いくらでも似たような表現が浮かんでくるが、要は、今いる位置に固定されたまま、どっちつかずの状態であらふらと揺れ動いている。何かをつかもうとする主体的・能動的な生活を楽しむというより、いろいろな荷物を背負い込みながら、バランスを保つことに必死のようである。

今の学生は、理想よりも現実を重く感じ、ありきたりの日常の中に閉ざされている。ずいぶん窮屈な世界に生きているものだなと私は感じていた。(私はこれをよい機会として、彼らに、"かつて学生であった人"へ自らインタビューをし、大学生としての自分たちを捉え直すという課題を出すことにした。)

学生による学生像

— 大学によるその相違はあるか —

すでに溝上(二〇〇一)らは、千二百人

への自己や生き方に関するインタビュー調査に基づき、「大学生が固有に生きる教育的、発達の、社会的世界との関係において」、現代に生きる大学生の心理的世界を見事に描

き出している。

実を言えば、地方都市の小さな新設大学に勤務する私は、大規模かつ有名もしくは伝統校に通う学生への調査に基づく大学生論というものに、どこか遠いものを感じていた一人である。全人時代に突入しようとするという今現在でも、新たな大学が誕生し続ける中で、ますます多様な「大学」というものが生まれ続けており、そこに通う学生を、同じ「大学生」というカテゴリーでひとくくりにすること自体にどこか感覚的に無理を感じていたためであろう。

だいたい新設、しかも小規模の大学というもののあり方は、時代の中での生き残りのためか、資格取得に重点を置き、就職の有利さ、いわば目に見える付加価値を強調するところが多いと感じる。(歴史のある大学も取得可能な資格を増やしていこうとする動きが増えていると思われる。)それは、知らず知らずのうちに、いわゆる自分さがし・人間形成につながるような「モラトリアム」提供装置としての大学の存在意義を薄めるあり方のものである。

そこに通う学生の多くも住み慣れた我が家から通える大学に來ているわけで、入学当初から、大学の出口の向こう側に、夢のある未知の世界というものを描くなどということはない。大半が、学費を負担してくれる親の期待通り、

給料やモノの豊かさで計ることのできるとても具体的な安定した生活、いい就職、というものを漠然と求めている。(大学がそれを保証することを宣伝の第一としているという面もあるだろう。)

どこか保守的と感じる彼らの姿に、私の中にある「青年らしさ」や「大学生らしさ」とのズレを感じ、他大学の調査によって浮き彫りにされた学生像と、目の前の彼らの生きる感覚とは同じなのだろうかという疑問を抱くようになっていた。

彼らは年功序列や終身雇用制度が信頼できなくなった社会に、それでも生き残れる道を探ることに必死である。学歴社会が終焉しつつあるという感覚も同時に彼らの中にはあり、甘さももちろんあるのだが、大学によって、この就職への有利・不利という差は、やはりまだ大きなものであるだろう。大学生が感じる社会への不安の大きさも大学の格差があるのではないだろうか。

共有される時間的展望

学生たちによるかつて学生だった方へのインタビューという私が課したレポートの結果は、そんな私の疑念を晴らしてくれた。やはり彼らは現代の学生として、日本中の多くの学生と共有される時間的展望の中に生きている。ズレて

いたのは、青年心理学を専攻しているはずの私自身の感覚であったようである(今となつては当たり前のように感じるが)。(詳細を紹介できないが、特に「自己」をめぐる語りに、地域や大学の特性による違いを見出せないほどである。)

学生一人一人が置かれる具体的な状況は大学によつても、大学内の位置によつても異なるのは確かであり、細部に関してはかなりの感覚の差があるだろうが、日本という社会の中で学生が生活しているという当たり前の構造は変わるはずもない。

戦前戦中の大学生が戦争という「うず潮」(西平、二〇〇五)に巻き込まれながら「明日は生きていかないかもしれない」という時間的展望において共通の世界に生きていたように、また、大学紛争時代には「明日は社会が変わるかもしれない」という期待と不安を受け止める中で態度表明をせねばならなかったように、ものの豊かさ、相反する不況という両面を肌で感じて育つた現代の大学生は、「厳しい社会」に出なければならぬという時間的展望を持って生きている。「社会」というあいまいな「実体」は、ものすごい圧力として彼らの背後で常に存在感を放ち、「現代の学生」に共通する姿を作り上げる原動力になっているよ

うに感じている。

青年としての学生

― 発達と社会という文脈から ―

青年期特有の時間的展望の意識は、学生がまづ何よりも発達のみにて「青年」であり、青年期の課題を共通の課題として背負いながら大学という場に生きていることを再認識させてくれる。

また大学は、社会という、より大きな場・空間の圧力の下に存在意義を変化させていくものである。それは何よりもまず高等教育機関として社会に位置づけられているわけであり、その社会的意義の変遷と青年自体の変化とのダイナミズムが、現代学生の「現代性」を織り成しているといえよう。人が社会の中で生きるのは自明であるが、特に「青年と社会」の関わりは深い。

二〇〇五年に出された「中央教育審議会答申」では、量的側面での「ユニバーサル段階の高等教育」は実現しつつあるとしながらも、結果として大学の多様化が進む中、「大学とは何か」といった本質や、高等教育機関の個性・特色の違いが不明確になってきているとの指摘がある」としている。

ユニバーサル段階の高等教育にあつて、大学は、①世界

的研究・教育拠点、②高度専門職業人養成、③幅広い職業人養成、④総合的教養教育、⑤特定の専門的分野(芸術、体育等)の教育・研究、⑥地域の生涯学習機会の拠点、⑦社会貢献機能(地域貢献、産学官連携、国際交流等)の各種の機能のうち、自らの選択に基づきどこかに比重を置き、ますます多様な個性を出していく必要もあるとされる。そこには「全体として多様化して学習者の様々な需要に的確に対応するため」という社会からの要請がある。しかしもっとも大きな事情は、「十八歳人口が約百二十万人規模で推移する時期にあつて、各大学は教育・研究組織としての経営戦略を明確化していく必要性」なのであろう。

大学が大学らしさを自ら演出し、しかも、社会への需要と期待に応えるために様々な変革を遂げていかねばならないのがまさに現代であるとすれば、大学自体も「社会は甘くない」という感覚に支配される中で、そのあり方を決めるざるをえない。「大学とは何か」という理念の前に、現実的な生き残りのための課題の中、大学もヤジロベエにならざるをえない面もある。

いずれにしても、大学という場自体を「これが大学だ」と明確に規定する(経済的な圧力に支配されない)一つきりの理念的な圧力は、社会にはもはやないのでないだろう

か。日本の大学生に「自分たちは大学生である」と、普遍的な「大学生アイデンティティ」のような感覚を覚えさせるようなものを、社会が失いつつある時代に学生は生きていく。

日本の

アイデンティティの

特異性

鑑(二〇〇二)は、「アイデンティティは時代や文化に深くかわつた私たちの心の状態である」と、わが国にはわが国特有の特徴があるということができるかもしれない」とし、「ことに戦後の経済発展と今日の経済不況は青年のアイデンティティの様相を特徴づけるものとなつていくということができると述べている。そして、一定の職業を持つことや家を継ぐことや家につながるということが自明でないという前提のもとで生きる現代の青年たちは、安定したアイデンティティの土台をそもそも欠いたまま、個人個人の価値をもとにアイデンティティを形成せねばならないという。(ここにも学生が抱く不安定感の原因があると考えてよいだろう)。

「『よい教育とは何か』『よい学校とは何か』『よい職業とは何か』、そして『人生とは何か』が個人のレベルで問い直されて、これまでの教育、学校、職業が『自分の存在』にと

って意味のあるものかどうかが問い直されると、これまで必死に追求されてきた価値が崩れてあまいとなくなってしまふ。現在はこのような価値の崩壊と混乱の時代の局面をはつきり示しているのではないだろうか。『なぜ学校に出席しなければならぬか』『なぜ職業につかねばならぬか』『なぜ一流の会社に入らねばならぬか』ということが問い直されている。これに対して、はつきりした答えを誰も出すことができない。『生きる』は基本的に個人の価値を中心としていることが強調されると、これまでの教育観、職業観、人生観は崩れてしまうのである。それらを土台として形成されてきたアイデンティティも崩れて拡散せざるをえない。」 鑑(二〇〇二)

インサイド・アウトな 生き方

一九六〇年代は大学が爆発的に大衆化した時代であり、結果として「より上級の学校へ」「二流よりは一流へ」という学歴トラック(線路、競争路)に乗ることが人生形成のあり方として重要となっていた。「この時代の大学進学は、やりたいことや将来の目標のために何を学ぶかがあまり問われず、ただ就職に有利ということだけで、受験する大学の条件が絞られていたと考えられる

(溝上、二〇〇四)」という。

これに対し溝上(前掲)は、現代の大学生の多くは、「アイデンティティ確立への向かい方が、一九八〇年代以前のアウトサイド・イン(外から内へ)の生き方ダイナミクスと逆の、インサイド・アウト(内から外へ)の生き方ダイナミクスにもとづいている」という。現代の青年の人生形成のあり方は、「自身のやりたいことや将来の目標を出発点として大人社会に参入しようとするダイナミクス」すなわち、内から外へというインサイド・アウトな生き方に特徴がある。

西平直(二〇〇五)が指摘する通り、生活実感の中に今も心理的真実として、根深い「内なる学歴意識」が学生や大人たちに残っており、既存の学歴神話も完全に崩壊しきつているとは言いきれない面は確かにあると思われる。しかし多くの学生たちが、「自分探し」という一般的な言い方に代表されるような、個人内部の自分らしさの感覚、すなわち「自己同一性(self-identity)」とエリックソンによって名づけられたようなものを優先させながら大学に入ってくるのも現代の学生の特徴であろう。

大学が抱える自己同一性と
心理社会的同一性
支援の課題

ところで、この「自己同一性 (self-identity)」の問題点は、何らかの形で感じ取られた「私らしさの感覚が、自分の所属する社会やコミュニティでの承認がないと十全に機能しない点にある。

「自分のなかで見いだした『私』が社会のなかで活き活きと機能してはじめて、アイデンティティは確立されよう。それは人が社会的存在だからである。エリクソンは社会のなかで機能する『私』のアイデンティティを『心理社会的同一性 (psychosocial identity)』と呼んだが自己同一性と心理社会的同一性の両方がともなうて、はじめてアイデンティティは確立される(溝上、前掲)」。

その時、大学生は未来への明確な時間的展望と確かな有能感に支えられながら社会人へと変容していくのだろう。大学は必然的に、こうした変容の過程にある青年たちが集う場となることになるのだが、はたして、自己同一性や心理社会的同一性の形成を支援する場となっているのだろうか。この課題は、改めて考えてみたい。

若者・青年論からみる
戦後の大学生像

岩田(二〇〇三)は、大学生文化の時代的変遷に関する考察を、これまでもっとも活発に行ってきたのは、おもに若者・青年文化論の論者たちであると述べている。本稿でも大学生は、まず何よりも若者であり、青年であるという視点を強調してきたが、それだけでは、現代の大学生像をとらえきれない。

溝上(二〇〇二)も、「これまで大学生の問題は、アイデンティティやモラトリアム、ステューデント・アパシーや反社会的行動、やさしさ、若者文化などという言葉を通して、直接的ではないにせよ、青年論、若者論の一部として扱われてきた」としている。その延長線上に大学生論も位置するとしながらも、「『大学生』という教育制度的期間にみられる大学生現象には、単純に、大人と子どもの発達の狭間期の問題というわけではなく、年齢的に若いという時期の問題でもない、『大学生』という教育制度が生み出した時期特有の問題があるはずである」と述べているが、その通りだと思う。

とりあえず、これまでどのような若者論があったかということだが、岩田(二〇〇三)が時期区分別に簡潔にそれらを要約したものは次のようなものである。

(1) 一九五〇年代までは、戦前期からの「エリート教養文化」が生き残っていた時代。

(2) 六〇年代は、ビートルズブームに始まり、全共闘闘争で終わる「対抗文化」の時代。

(3) 七〇年代は、「しらけ」の時代。

(4) 八〇年代は、「新人類」の時代。

(5) 九〇年代は、「おたく」「新・新人類」の時代。

これらは「若者世代の立ち居振る舞いのなかでも、社会的に目立つ目新しい行動パターン・風俗の変化や事件によくに着目し、それを読み解くという形をとることが多い点」が共通しているという。また、それらの底流にある認識にも共通のものがあるとし、次の二点にまとめている。

その第一は、「他人とのコミュニケーション下手を含めた、人間関係の希薄化・孤立化傾向の増大」である。この例としては、「カプセル人間」論、人間関係における「距離感喪失」論、「シズイド人間」論、「おとなになれない青年たち」論、「コミュニケーション不全症候群」論、また栗原彬の一連の「優しさ論」などが挙げられる。

第二は「遊戯性」の増大傾向である。例としては、井上俊が、学生文化を「まじめ」(社会的価値)志向、「功利」(世俗的成功)志向、「あそび」(私的自由)志向に分離し、六〇

年代以降、「遊戯性」への傾斜が顕著になっていったと指摘したことを挙げている。レジャーランドと揶揄された大衆学論などもここに入るだろう。

いずれにしても、「先端的で目立った行動を取る、一部の突出した若者像がつかられがちになる」なかで、岩田は、「田舎の大学生や、大都会にいても平凡な生活を送っている大学生の姿は抜け落ちてきた可能性」があると指摘する。学者やマスコミによって描かれた大学生像は、原イメージとして一人歩きを始め、それにつられる形で、当の学生たちも自らを自己定義していくという、マスコミを媒介にしたイメージの定着現象もあったのではないだろうか。(最近でいえば、ニートという言葉でさえも、すでに学生たちの日常用語と化している。)

「学校化」する大学

「生徒化」する大学生

武内清(二〇〇三、二〇〇五)や溝上(二〇〇一、二〇〇二、二〇〇四)らは、先ほど触れたように、「大学生」という教育制度が生み出した時期特有の問題を捉え、大学生のリアルな姿を描こうとする。そこには、伝統的な若者論や青年論で見られたような、多様な大学生のあり方を一言で片付けようとする姿勢は見られない。そして、それぞれの調査を基盤とした大学生の生の実

態をもとに、武内は、「生徒化」という言葉で、溝上は、「ユニバーシティ・ブルー」という言葉で、現代の学生像を描き出している。

武内(二〇〇五)は大学改革の方向性を踏まえつつ、キャンパスライフの今と昔を比較し、大学が「学校化」し、学生は「生徒化」していると指摘する。二〇〇三年秋に実施した「十二大学・学生調査」から武内が明らかにしたのは、学生が「勉強志向」「まじめ志向」「資格志向」の方向へ向かっているということであった。

「最近の学生は『出席重視』『勉強志向』『教員の指導』『実学』を期待する。大学生が『まじめ』になったともいえるし、『生徒化』しているともいえる。『生徒化』とは、大人に從順で、自主性が乏しく、与えられた目標を素直に受容する性向であり、教育重視の最近の大学の『学校化』現象もその背景にある。」

ある教員からみた
学生の行動や意識

藤村(二〇〇五)は、「青年はいつもの今どき」であるとし、発達段階の境目が不明瞭なところに現代の日本社会があり、若者は、「子ども・青年・大人の要素が混じり

あうような時代を生きている」という。その藤村が大学教授という立場から見た学生の行動や意識の特徴について、五点にまとめている。

第一は、学生が自らを「生徒」と呼ぶ機会が多いことである。

「大学は高等教育機関だけど、高校の延長上の学校という感覚にある。(中略)現在は大都会の高校生であれば五〇%以上が大学に行くので、隣の人は皆行っているように見える。大学に行くことは優越感もないけど社会貢献の義務感もない。敷かれたレールの上を歩んでいるというのが彼らの実感であり、生徒という表現は、無自覚ながら、レールの延長と彼らが思っていることを言い得て妙な表現となっている。」

第二は、日本がある程度豊かな社会を作ってきたため、若者たちの社会的困難の経験は、上の世代に比べて少ないという点である。

受験というハードルはあるものの、それは段取りの見えるものである。社会に出て、段取りの見えない問題に直面したとき、ハードルを回避する方向に気持ちが向いてしまうという。「目の前のハードルを突破するのではなく、な

くする方向に動く」という性向がある。これは、確かに真面目に授業を受けはするが、「それを超えて自分で展開をしていくのは弱い」という姿とも重なる。

第三は、コミュニケーション範囲が限定されがちなことである。

「知っている人同士の狭い範囲で集まる傾向が強くなっていく。その一方、群れている割にお互いの感覚は希薄だったりする。相手を十分に知らなかったり、一緒にいても皆別の行動をしたりする。」

藤村は、群れているけど関係は希薄という感じを言語化し、この現象を「みんなぼっち」と名づけている。

第四は、敏感と鈍感の同居である。

「数人の範囲では過剰なくらい相手にどう思われているのかを気にする一方で、その外部にはとても鈍感だったりするという傾向」が、現在の若者たちの特徴として考慮すべき点であるという。自分のことをチェックするという意味で、「自己モニタリング」とも言われる面で、それがすごく強い部分と弱い部分があるのだという。

第五は、親との葛藤の少なさである。

個室を持ち、携帯電話で外部との連絡も親に聞かれることもない若者たちは、「自分の世界を持てるので、親との葛藤が表面的には少ない」。親と不仲でないから同居しているし、話が合わなければ自分の部屋に行けばいいという様相から、家族は寝に帰るだけという意味で「ホテル家族」という皮肉な言い方もされてしまう。

ユニバーシティ・ブルー

（大学生の憂うつ）

縦横無尽に大学生論を展開する溝上は、文学部のある女子学生が、学生によく見られる憂うつ現象を、「ユニバーシティ・ブルー」と呼んだことから、「元氣そうに見える大学生の奥底にある何かしらの不満足感、充足しきれない悶々とした憂うつ感情」をうまく捉えたものとして、この言葉から様々な大学生の心理を描き出した（溝上、二〇〇二）。後に出版された著書『溝上、二〇〇四』においては、これが『概念ではないとしても、大学生の抱いている憂うつ感情を表現するのに響きのいい言葉として用いているが、その憂うつは、学生にとつての大学四年間の捉え方、過ごし方に潜む、ある共通の特徴からきていると述べている。

「入学前、大学に入ったら思いっきり好きなこと、やりた

いことをやろうと張り切っていたこと、入学後それがうまく実現できずに焦っていること、そのくせやらなければならぬことはたくさんあること、あつという間に時間が過ぎてこの調子ではすぐ四年間(六年間)が過ぎると思ってしまうということ。」

時間的展望の拡散状態とも感じるこの感覚は、私が学生に課したレポート中にも頻繁に出てくる。明るく、悩みもそれほどなさそうに見える現代の学生は、どこかに憂うつさを抱いている。エリクソンのアイデンティティの言葉に戻って私なりに表現するならば、「自由」とか「やりたいこと」があるという、どこか具体性を欠く感覚に基づく自己同一性をもって大学に入学する学生が現代は多い。しかし、「社会は甘くない」という表現の中に見られるように、あいまいではあるが実体感を持って迫ってくる心理社会的同一性の圧力の中で、確かにあつたと思われたはずの感覚が混乱してしまい、自分が何だかわからなくなるという構造があるのかも考えた。

「とりあえず大学生」

「現代では大学というところは入ろうと思えば自分のレベルに合ったところ、あるいはレベルを下げれば比較的楽に大学に

入れるような時代になってきている。(中略)とりあえず大学に行っておけば何とかなるか、という甘い考えを持つ学生もいるというのが現状なのである。(二年生・女子)」

「現代の大学生は、というより若者は、様々な面で意欲が低いと思う。私は、将来こうなりたいという希望がなく、具体的目標もなく、とりあえず大学に通っている状態だ。以前は私のような人は進学するのではなく就職して社会に出ていたようだ。今は大学への進学が気軽にできるようになった。やりたいことがないから『とりあえず大学に行ってみよう』と考える人が増え、意欲が低下し、適当な人が多いのと思う。(中略)大学の講義に対しても意欲が低い卒業したいという気持ちはあるため出席率が高いが、実になっていない。(二年生・女子)」*波線は橋本による。

私が課したレポートに、学生たちはこちらが驚くほど真面目に応えてきた。(レポートは、かつて学生だった人へのインタビューをベースとして、大学と大学生について考察をするというものである)。

これも現代学生のイメージ通りだなと感じつつレポートを読んでいくと、「とりあえず大学へ」という言葉の多さにひっかかった。中でも、インタビューの対象となった三

十歳の女性が述べた言葉はストレートで、わかりやすい。

「昔と現代の大学生に違いがあるか。あるとしたらどんなことか」という問いに答えて

「『とりあえず大学生』が増えた。社会もそれを推進しているため、やりたいことを高卒の年齢で決めるのは難しいのだろう。大学くらいは行っておきなさい、というような人が増えた。」

「やりたいことがはっきりしないからとりあえず大学へ」というインサイド・アウト的なものもあれば、「親が大学くらい出しておけというから」「みんなが行くから」「行くのが当たり前だから」というようなアウトサイド・イン的な「とりあえず大学生」もいる。いずれにしても、「大学に入ったなら、何かがそこで待っている」というような期待はすぐに裏切られることになるものだが、現代の大学は、こうしたあいまいさを内に抱え込んで入学してくる学生を相手に高等教育に取り組まねばならなくなっている。

自由から逃走する!?

もしくは

“やりたいこと”を

“やらなければならぬ” 大学生

「とりあえず」という言葉を発する学生たちの中には、より深い無気力や根の深い自己意識の混乱の

問題に直面している者もいるようであり、単に甘いとかやる気がないなどという枠組みでは捉えきれない背景もあると指摘する学生もいた。

「明確な将来の夢もなく、ただ時代の流れから大学に行き、勉強をしないで四年間を過ごす大学生が目立つ世の中です。現代は価値観の多様化と高まる個の意識があり、何に關しても選択の幅は広がり、判断も個人に委ねられるようになりました。このような時代背景の中、学生もどのように考え、行動したらよいか悩んでいるのではないのでしょうか。親の仕事を継ぐようにと言われて育った昔とは違います、(中略)親からは『好きな将来を歩め』と言われる現代、大学生の無気力も多様な価値観の表れだとして片付けるわけにはいきません。大学生も何かしら考えながら生きているでしょう。しかしその考えの答えは昔より幅の広く深いところから探さなくてはなりません。そのためまだ動き出せず、答えを見つけない

ために今をさまよっているのではないでしょうか。(二年生・女子)

ある講義で学生たちに、親がみんなにどのように生きることを望むかを聞いたときに出た意見としてもっとも多かったものが、「自分のやりたいことをやればいい」という意見である。

レールを敷くのもなく、壁としてたちはだかることもない。しかし、「やりたいこと」をやれという割には、「良就職」をしると漠然とした要求を突きつけ、そのために学費を負担して、「親に悪い」という負担感を学生にもたせている。『やりたいこと』を『やらなければならぬ』大学生は、「昔より幅の広く深いところから」それを探してさ迷っているというこのレポートは、フロムのいう「自由からの逃走」を思い起こさせた。矛盾だらけの中で、矛盾する気持ちを抱えて現代の大学生は生きている。

「育私」の場づくり
「教えているけど育てていない」ということに日本の教育問題の根源があると結論付けた谷岡(二〇

〇四)は、学生時代には「育私」を目指すことが大事だと説く。

「強調したいのは、大学生の年齢になれば、教師が学生を育てる育児にかまけるのではなく、学生が『私』たる自身を主体的に育てられる場と状況を創出することである。学生が『知る』ことと『できる』ことの違いに気付き、自らを育てるための『育私』への意志をもち、挑戦するための刺激と環境、支援を与えられることである。その具体的方法論が明確にリアリティと選択肢を伴って示されることである。」

実際に、中京女子大学学長として実践をされている中で、スポーツ分野でのこのような場作りが結果を出しているという。

インサイド・アウト的な人生形成を中心とする学生が多数を占めている中で、個人の自我の育成を抜きにして、円滑な大学運営はできない時代に入っているのではないだろうか。

現代の大学の課題

高度な専門的知識を詰め込み、資格を取得させ、専門職を排出するなど、かつての「象牙の塔」というようなイメージからは程遠い、社会からの実用的で多様なニーズに応えなくてはならないのも現代の大学である。しかし同時に、青年期のアイデン

テイテイの課題を、かつてより複雑であいまいな形で抱えている学生をいかに育て、「社会人」としての基盤となる心理社会的アイデンティティの基礎を築かせるか、これこそが現代の大学に課されたテーマのように思われてならない。自我が育つ「場」としての大学の機能の強化。この課題への答えの出し方は、大学の姿を大きく変えるものかもしれない。

「青年」は社会の変化に伴い二十世紀に「誕生」したと言われる。ここに来て、「大学」もそして「大学生」も、社会という母のもとで、新たに生まれ直しの時期に来たのではないだろうか。次元は違うが、西平(二〇〇四)が、人の「偉さ」を論じた中で次のように述べる部分から、未来の大学像についてヒントが得られるように思う。

『「いったい、偉いとはどういうことなのか」と問い始めると、間もなく、あまりに複雑多岐なもので、すっきりした答えなどとても望めないとわかってきます。結局、個人個人がみな、違った内容の偉さをイメージしていることがわかり、最後には『どういう人が偉いのか?』と問うのではなく、『あなたはこういう人を偉いと思いますか?』という形に、問いのほうを変えていかなければならないことに気づきます。』

「人」という言葉を「学生」と、そして、「偉い」という言葉を「理想の学生」もしくは「理想の大学」というように、本稿のテーマにそって読み替えると、なかなか興味深い。

かつてとは違い、現代は大学が学生によって選ばれる時代である。また、大学は社会に対して自らをアピールしなければならぬ時代でもある。問われるべきは、学生や大学の現在の姿というよりも、今後どうした姿を理想のものとするか、その大学自身が描き出すイメージなのではないだろうか。本稿を書きながらもっとも強く感じたのは、大学と学生の置かれている現代の、まさにこうした「現代性」であった。

まとめにかえて

—ある女子学生の

レポートから—

最後に、これまで述べてきた現代の学生像・学生論の要素を見事に表現したレポートがある。かなり長いですが、最後に掲載しておきたい。

「今と昔の大学生の相違点として価値観の違いがよく見えると感じた。五〇代、七〇代の方は、本当に学びたい人が行く、もしくは行きたくても行けないという状況であり、大学

へ行くというのは、一部の限られた人間とされた。六十九歳の女性も言っているが、自分の家のみでなく、隣近所の子どものお守りをするのが当たり前で、学校に行ける状態でなく、大学にいける年頃になっても経済面から通うというのは夢のまた夢だったという。(中略)

現在の大学生との違いの一つは、動機にもある。六十九歳の女性は、『本当に学びたかったんだよ』と何度も言っていた。しかし、現役の大学生や三十代の方に聞いてみると、『自分のため』『行っていないと後が大変そう』『就職に便利』『やることなくとりあえず行ってみた』という答えが多い。現在では、大学に行かない方が変だという時代だということである。

ここまで見てみると、社会がそうさせていると感じる。隣近所の子どものお守りや畑仕事を手伝う事が『当たり前』とされていた昔と、大学に入って『当たり前』という現在では、明らかに意識の違いが見られる。四十四歳の女性は、時代からいっても大学に行こうと思えば行けたのだが、行かなかったのだという。すぐく後悔し、子どもには大学に絶対入って欲しいと強く言っていた。

では、大学に入れば知識が増え、良い人間になるのかといえば、そうは思わない。大学に入るという事は、人間として

の成長や、より専門的な知識を蓄えることだが、就職の先延ばしでもある。まだ、周りの人間に守ってもらえるという感覚が強いかもしれない。心理的離乳(自立)をしているようで、いない感じを受ける。大学に入ること、モラトリアム期間も先延ばしにされ、時代がそれを肯定している気がする。だから安心して、自分から変化しようと思わないのかと思う。大学に入ること、『まだ学生でいられる』と安心する。しかし、いざ就職を目の前にすると、年齢的には成年なのに、いきなり社会に出されてしまう小さな子どもようになってしまふのではないかと、正直、自分に対して思っている。

学校は就職に有利な資格を得るために、自己を形成するために……と様々な理由で存在している。それは間違っていないと思うし、私も自分のため(将来のため)に入った。しかし、大人になることを遅くし、それを肯定しているのも、大学であり、この時代だということも言える。(『まだ大学生だから』)。

二十三歳からきつちりと大人というのを期待するのは、酷ではないだろうか。(大学生自身も変わろうとしなければならぬのだが)。

みんなが行っているから行こう、そういう見方もある時代で、改めて自分が何をしたいのか考えたい。大学に行く事で、

様々な人に出会い、色々な視点に触れ、視野が広がった事もうそではない。大学に入った事で自分なりに成長したと思う。ただ時代の力は本当に恐いなと思った。」(三年生・女子)*傍線は原文のまま

脱帽しきりのこのレポートの終わりに、彼女は、「まともらない文ですみません」と小さく書いていた。彼女のような現代を生きる学生を前にして、私はかつて大学生だった自分を思い返し、自らを反省した。そして、このような学生にめぐり合える、大学教員という立場の醍醐味と責任の重さを、改めてかみしめている。

〈参考文献〉

岩田弘三、「勉強文化と遊び文化の盛衰」、竹内清編著、『キャンパスライフの今』、玉川大学出版部、二〇〇三、一八四～二〇三頁。
竹内清編著、『キャンパスライフの今』、玉川大学出版部、二〇〇三
竹内清編著、『大学とキャンパスライフ』、上智大学出版、二〇〇五
鑑幹八郎、『アイデンティティとライフサイクル論』、ナ

カニシヤ出版、二〇〇二
谷岡郁子、「学生時代には『育私』を目指そう」、「大学と学生」、日本学生支援機構編、第一法規、二〇〇四年十月、第七号(通巻四八一号)、二～五頁

西平直喜、『うず潮・ある青春と敗戦前夜の軍隊』、山梨ふるさと文庫、二〇〇五

西平直喜、『偉い人とはどういう人か―人生の選択のために―』、北大路書房、二〇〇四

藤村正之、「キャンパスライフの風景―学生文化の変容とその社会的構図―」、竹内清編著、『大学とキャンパスライフ』、上智大学出版、二〇〇五、五九～八六頁。
西平直、『教育人間学のために』、東京大学出版部、二〇〇五

溝上慎一編著、『大学生の自己と生き方―大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学』、ナカニシヤ出版、二〇〇一
溝上慎一編著、『大学生論―戦後大学生論の系譜をふまえて』、ナカニシヤ出版、二〇〇二
溝上慎一、『現代大学生論―ユニバーシティ・ブルーの風に揺れる』、日本放送出版協会、二〇〇四